

宮 紀子著

『モンゴル時代の出版文化』

櫻 井 智 美

精力的に研究を進める宮紀子氏の著作『モンゴル時代の出版文化』が世に問われた。著者の研究の核心が示され、その広がりが一望できるようになったことをまず喜びたい。本書は、「歴史、文学、語学、宗教、美術の間に築かれた意識の垣根」(一二二頁)以下、「カギ括弧」(頁数)は本書からの引用)、あるいは、従来の学問分野の壁を全く感じさせないものであり、全編を通してのスタンスばかりか、各論における分析手法においても、諸研究分野の知識と方法論を駆使している。使用する資料も膨大な数にのぼる。今回、本書を評する大任を負うことになったが、評者は本書の各論すべてを公平・正當に評価する能力を持ち合わせておらず、あくまで少ない知識から論ずることをお許しいただきたい。

本書は、六七三―四頁で著者がまとめるように、一九九八―二〇〇四年にかけて刊行された著者の論考、より直接には、二〇〇二年に提出された著者の博士論文とその後のいくつかの論考をもとに、微修正・加筆を行ったものである。評者は以前、日本における、概ね一九九〇年代以降の元代史・元朝史研究を総括したこ

とがあり、その際に、著者の初期(二〇〇一年以前発表)の論文について、注目すべき研究として比較的詳細に説明した^①。ただ、既紹介の論文についても、著書としてまとめるにあたって(あるいは博士論文としてまとめる際に)、注を書き換えているなど細かい変更点もあるため、本評でもあらためて各論の内容と学説史上の意義などについて述べたい。また、既出論文になかった新たな引用、特に、朝鮮・日本に関する資料や仏教関係資料、日本・欧米所蔵資料の引用も多数見られるので、今後、著者の研究については本書を参照すべきことをまず指摘したい。

さて、各章節のタイトルは著者の研究対象に対する視点を示す好材料でもあることから、まず慣例によって本書の目次を示す。括弧内は初出年である。

序章

第Ⅰ部 モンゴル時代の「漢語」資料と絵本の登場

第1章 「孝経直解」の出版とその時代(一九九八)

第2章 鄭鎮孫と『直説通略』(一九九九)

第3章 モンゴル朝廷と『三國志』(二〇〇一、〇四)

第4章 モンゴルが遺した「翻訳」言語―旧本『老乞大』の発見によせて―(二〇〇四)

第Ⅱ部 大元ウルスの文化政策と出版活動

第5章 大徳十一年「加封孔子制誥」をめぐる(一九九九)

第6章 『廟学典礼』節記(二〇〇二)

第7章 程復心『四書章句』出版始末致―江南文人の保拳―(二〇〇二)

第8章 「対策」の対策——科挙と出版——(二〇〇三)

第III部 地図からみたモンゴル時代

第9章 「混一疆理歴代国都之図」への道——十四世紀四明地

方の「知」の行方——(二〇〇四)

終 章

さて、本書は、従来研究論著として提示されていた、所謂「学説」からは、かなり隔たった視点・角度から出版について論じている。書籍を、その内容から理解するだけでなく、書籍が当時から今に至るまである地点に存在することが持つ意味についても、最大限に分析を行っている。本書の価値の一つは、まさにその点にある。だからといって、各分野で積み重ねてきた議論や研究とはかみ合わない代物かと言えば、全くそうではない。それぞれの分野で、「思い込みと事実の無視」(一一頁。もちろんそれは学者の能力だけに起因するものでなく、利用できる資料の状況の差にもよるだろう)から一旦距離を置き、資料レベルから諸学説を批判することに成功している。それぞれの意見は「通説」と大きく異なっており、時にシニカルな表現もとられるが、本書全体として所期の目的を十二分に達成している。

では、本書の目的とは何か。モノとしての絵画(美術品)の例示を枕として出版物につなげるという、先行研究の列挙ではない、少々型破りな「序章」においてそれは明示されている。「対象をとくに㉔口語漢語の語彙を用いて書かれた出版物、㉕挿絵入りの出版物、㉖儒教関連(とくに朱子学)の出版物、そして㉗とくじの世界観が現れる地図と地誌にしほり、そこから切り込みを検討

する。したがって、従来の「出版史」のような編年、分野別の概説書の形はとらない。ひとつひとつの書物の編纂、刊行の経緯をたどることによって、㉘モンゴル朝廷の文化政策と㉙各機関のシステム、㉚科挙制度、㉛文人の動向など基本的な——しかし未解明のことからの検証につとめ、モンゴル時代の雰囲気を紹介する(一四頁。アルファベット・傍点は評者、以下同)という目的である。つまり、モンゴル時代前後の出版物の中から㉔㉕㉖の範疇の出版物を抽出し、第I部では㉔、㉕を、第II部では㉖を、第III部では㉔を主な材料として、モンゴル時代の㉔㉕㉖のような諸問題を論じると同時に、全体としては、モンゴル時代が根本的にどんな時代だったかを叙述しようとしたのである。「序章」で「雰囲気」という言葉がキーワードとして繰り返されることに、モンゴル時代がもつ時代性と呼ぶべきものを明らかにする姿勢がよくあらわれている。以下、各章ごとに見ていこう。

第1章では、モンゴル時代特に重んじられた『孝経』に関連する出版の経緯を、ウイグル人貫雲石による『孝経』の注釈書、『孝経直解』を中心としてまとめる。その中で、該書で注釈に用いられる文体が、『元典章』などでも見られるモンゴル語直訳体に類似することを指摘し、その意味を、モンゴル語パージョンの『孝経』の存在に求めた。そして、各種『孝経』が朝廷の命令や指示のもとに出版された経緯を追跡可能な資料から導き出し、これまで、武宗の「武」のイメージで考えられたカイシャンの時代が、続く仁宗アユルバルワダの時代にも増して儒教文化振興に熱心であったことを明らかにした。論文初出時に論拠が少なかつた

点について資料が随所で添加される一方で、多少無理を感じた推測をなくすことで、より説得力をもった議論が展開されている。漢文を句読だったものから書き下しに変更し、モンゴル語に関する解説を加え、論文発表時未見であった先行研究を取り入れるなど、この間のためまぬ謙虚な研究の姿勢が表れている。

第2章では、鄭鎮孫とその三著作『直説通略』・『歴代史譜』・『歴代蒙求纂註』について、『直説通略』を中心に解説し、それらにまつわる様々な歴史的・文学的問題を解き明かした。三皇五帝から宋・金代までの大事を綴る『直説通略』の一番の特徴は、その白話の文体にある。第1章と同じく直訳体の意義について解説するだけでなく、モンゴル朝廷の出版に対する保護政策がより鮮明に描き出されている。本章ではまた、三著作を含めたモンゴル時代に編纂された通史について、それらの編纂姿勢やソースを検証することから、モンゴル帝国治下の出版に通底する歴史認識を推測した。同時に、それら通史を享受する階層も官僚・文人であることに注目し、低俗な民間の読み物と認識されてきた出版物の価値を見直すことよって、モンゴル時代の文学の再評価も行っている。鄭鎮孫の三著作のうち、『直説通略』・『歴代史譜』は影印出版されておらず、北京・台北両地における現地調査によって、初めて研究が可能になる。その点、もう少し丁寧な資料提示や、原物を想像させるような図の提示があれば、読者はより理解を深めることができたと思われる。

第3章では、『三國志』の成立・流通に果たした大元時代の役割を、これまであまり注目されていない、『三國志』関連の資料（郝經『統後漢書』、趙居信『蜀漢本末』、胡琦『関王事蹟』な

ど）の出版過程を丁寧を追うことから論じた。その結果、それら著作の成立に、朝廷で活躍する官僚が関与したほか、劉備・関羽・張飛・諸葛亮などへの朝廷の加封・追封が、密接に関わっていたことが明らかにされている。第2章と同じく、文学作品の成立背景だけでなく、その書籍を享受する階層がどんな人々かという問いへの答えは第II部とも通じ、その後の著者の研究展開へ大きな一歩となっている。歴史を考察範囲としている評者には、先行研究や諸文学資料との関連がわかりにくい部分もあったが、平話・詞話の文学史上の位置づけに一石を投じたことは間違いないだろう。

第4章は、遼・宋時代から明・清に至るまでの口語資料や命令文を丁寧にして、当時の白話とモンゴル語直訳体の関係、及び直訳体の存在が持つ意味について時代を追って論じており、③の資料群を総動員した第I部の核になる部分と考えられる。本章の価値は、最終目的である、旧本『老乞大』の言語がやはりモンゴル語からの「翻訳」言語であること、の「実証」（一八八頁）だけにはもちろんとどまらない。『老乞大』は、高麗商人が大都へ商売に行く過程を描いた書物で、朝鮮で語学学習の教科書として用いられた。時代がくだるごとに改訂され、語法やハンゲルの有無・注釈が異なる版本が作られたが、『旧本老乞大』と呼ばれる現存最古の版本が一九九八年に発見された。その語法は、第一、第二章であげた一連の直訳体書と相似しており、本章では、その意味が様々な角度から分析されているのである。そして、直訳体は口語とは全く異質のもので、本来モンゴル語による文章の存在を前提として編み出された「人工の文体」（同前）であることを明

らかにし、それら資料から想定されてきた、「漢児言語」という当時華北の人が使っていた口語の存在を完全否定する。これまで漢語からの発想でなされていた議論をモンゴル語から組み立て直すことで、反論の難しい結論を導き出すことに成功しているようだ。同時に、直訳体を創生したモンゴル時代の文書行政の影響が明初や朝鮮まで引き継がれ、モンゴル語による外交文書が用意されたことを、直訳体外交文書の存在から実証している。この作業では、地理的に、チャイナプロババーだけでなく朝鮮・ウイグル・チベット・ブルネイなど完全な他言語地域との交渉において直訳体が使われた意味についても、これまでの研究史を丁寧を追うことによつて、モンゴル語が強く影響したことを指摘している。各種資料のモンゴル語バージョンの存在については断定できない場合もあるだろうが、少なくとも文書行政上の「人工の文体」として直訳体が時代的にも地理的にも幅広く用いられたことは、これまで指摘されなかった。この事実の解明には、朝鮮資料が大きな役割を果たしている。従来、朝鮮史において、中国との関係が考察の対象となる一方で、モンゴルを交えた国際関係の考察が十分でなかったことが、朝鮮資料に明確に残る事実を覆い隠していたのだらう。その意味で、本章は言語・文学史の書き換えにとどまらず、東アジアの歴史像を塗り替えるものだと言えよう。蛇足ながら、今後、もし言語接触による「漢児言語」を議論するならば、フィールドワークなど人類学・社会学や言語学の手法をも利用して、多言語地域で言語がどのように影響を与えあうのかといった角度から、文法・語彙を分析するような研究をも参考にする方法があるのではないか。

本章までを通じた第Ⅰ部では、これまでの中国語学研究分野におけるモンゴル語的要素の過小評価が批判され、中国文学史上におけるモンゴル時代の評価が見直されている。語史について詳細に説明した第4章では、いかなる専門の研究者にあつても有無を言わせないだけの資料の博搜と提示をしている。ここまでの資料を一概に見渡す視点と努力によつて、これまでになかった成果を生み出しているのである。一方、第Ⅱ部は、どちらかといえば、歴史分野の成果が強調できる。モンゴル時代における儒学振興政策については、これまで全く無視されていたわけではない。しかし、具体的な様相やその背景については、十分に論じられていないとは言い難い。出版という視座からそれを見つめ直す作業も、著者ならではのといえる。

第5章では、第1、2章と同じく、武宗カイシヤン期における文化政策を成宗テムルから英宗シナイバル期までの中心に据えてとりあげる。分析対象の中心は「加封孔子制誥」という、孔子の称号に「大成」の二字を加えて「大成至聖文宣王」とする内容のカイシヤンの聖旨を刻した碑文である。その碑の文面が移録された多くの金石書を丁寧に比較検討しながら、聖旨が出された前後の経緯を明らかにする。出版とはやや趣を異にする話題のようにだが、著者は、碑を立てることと書物を出版することに、記念・永遠性という共通点を見だし、立碑と出版が連動することも視野に入れていたため、そこには一貫した姿勢が見られる。モンゴル語から漢語への詔の翻訳過程など、実際に聖旨が地方に知らしめられる経緯についても注意を払っており、所定の制度だけでなく運用の現場が明らかにされている。また、本章のもう一つの価値

は、「おわりに」における『元典章』の版本問題への言及にある。部分的に綿密な校定が行われた『元典章』は、その作業の綿密さと裏腹に、その出版過程については安易に民間出版とイメージづけられてきた。しかし、現行元刻本の構成や他書への引用から、カイシャン期に国家出版された『元典章』の存在を指摘し、そのイメージを覆す。本章と後に述べる第7章は、大元ウルスの儒学・朱子学に対する態度から、政治・制度の世界にまで考察が及んでいる点が大いに評価できる。

第6章では、『廟学典禮』が成立する過程を考察し、それが現行のような儒学関連の公牘（先例集のような部分）を中心とする編纂物ではなく、絵入りで礼制（釈奠の儀式など）を中心に扱う書籍として、成立し利用されたことを明らかにしている。その論証には、⑤⑥の資料群を駆使した書誌学的手法が遺憾なく発揮される。昨今特に注目される「類書」の挿絵が論証に用いられる点も、第8章以降の研究手法・議論へもつながっていく。本章は、基本資料たる『永樂大典』が元代の研究に十分にかざされていない点へ警鐘を鳴らしている。一方、本章は第4、9章の内容と同じく、明代への元刊本の伝承問題を扱う中で、当時朱子学が「学びの世界」を席卷していく様子を見事に提示している。江南の中でも、徽州や浙西地域から、朝鮮・日本とつながりが深い四明（慶元・明州・寧波）へと記述の重心を移していつている。なお、本章では論文初出時より註の増加が目立つ。

第7章では、程復心の『四書章句』の出版を手がかりに、国家出版の具体的過程と江南士人の保拳の手續が克明に描き出されている。そして、人物の出仕にあたってその著作が提出され、そ

れらの手續きに儒学提拳司と肅政廉訪司が深く関わっていたことが明らかになる。モンゴル時代の国家出版制度がここまで具体的に説明されたことはこれまでなかったし、保拳というシステムの運用について実証したのも本章が初めてだといえる。また、著者は科挙再開を「文教政策の象徴として兄武帝カイシャンの「加封孔子詔」を越えるものを出さねばならなかったアユルバルワダの「事情」に、朱子の理念にもとづくシステムティックな学校教育促進の意図を秘めた文人たちが乗じた」（三五〇頁）ものだと推測する。科挙という制度の解明にも政治的事情と官僚たちの意図が絡むことを念頭に置くべきだと提起するようである。本章ではさらに、『四書章句』のような四書の注釈書を生み出した徽州における程氏らの人的つながりや、李孟を中心として科挙再開に関わる人物たちの動向にも筆が及ぶ。これらの問題については、今後学界としても追究が期待される。

第8章は、長大な論文の改稿であるが、当時に生きる知識人階層の実態を、出版と科挙を通して描くという、これまでの文学・歴史分野片方では不可能に近かった問題を一括して扱っている。序章と同じく、もう少し丁寧な註や説明があればよりわかりやすくなるだろうと思われる部分があるほか、校正不足が若干感じられるが、それは本章の議論の広さと深さからすれば些末な問題に過ぎない。本章では、限定的な側面からしか論じられてこなかった大元時代の科挙の問題について、「対策」科目を中心に、その実施内容と受験者の所有する書籍や学習法が詳細に論じられている。論拠はもちろん当時の出版状況とそれをとりまく人々の動きであり、当時の科挙システムに対する人々の本音と建前が見事に

描かれている。その中で、記念出版・国家出版などのシステムをめぐる諸問題、江西・四明を中心とする当時の士大夫・知識人の生き方、儒仏道兼通の時代背景などにも言及し、他章のエッセンスをも取り込んだ記述となっていて圧巻である。その分他章と相互に参照したい場合も出、その際巻末の「人名索引」(六七五―七〇三頁)・「図書索引」(七〇四―三三頁)は利用できるが、議論が多岐に渡るがゆえに「語彙索引」あれかしと思う場合もあつた。また、モンゴル時代の事象を必要以上に美化し、明初への言及で辛辣な言葉を並べているような印象を禁じ得ず、著者の研究の最終目標の一つ「……のちの明、清、朝鮮、日本に伝播し、影響を与えていったかを明らかにすること、遡ってモンゴル時代の目線から同時代資料が少ない遼、金、宋の社会文化の一端を明らかにし且つ明への連続性、変化をも眺めること」(一四頁)という点を、読者が冷静に考えられなくなってしまう恐れが生じるようでもある。

第Ⅲ部は、イコール第9章であり、①の地図と地誌からわかる歴史世界を問題として扱ひ、元来一本の論文として発表されたことが信じられないほどの分量を持つ。註も若干の変更と内容の増加を経て、四二九条にもほる。本章では、新発見の「混一疆理歴代国都之図」を足がかりとして、その地図の成立に至る経過や事情、そしてその後日本の各処に蔵されるまでの流伝をめぐる諸問題について論じている。「現存最古の世界地図」(四八七頁)と云うべき本地図の内容自体には、プライオリティーを考慮して踏み込まないが、第4、8章の議論を進めて、「人」「モノ」「情報」「地域」(四八九頁)という、地図成立の舞台となった四明

と朝鮮における当時の士大夫を取り巻く「知」の背景、知識世界をあらわにしており、他の追隨を許さない著者の力量を示している。その中で明確にされる類書の成立過程や本質は、それらを資料として取り扱う際の難しさをも物語っている。また、使者や僧侶を介した中国・朝鮮・日本の人的交流を正面から描いている点も、各国史や分野別のこれまでの学界にあって大いに評価できる。ここでは、日本史や仏教史においても十分には利用されていない資料が、四明を舞台とする歴史世界の解明に用いられている。なお、本章で扱われる問題は、昨今の公費研究との関連が密であり、多くの研究者に一読を勧めたい。唯一本章で気になった点は、問題の根底にある「混一疆理歴代国都之図」全図の引用が無いことである(初出の冊子には収録される)。関連地図の所蔵機関が日本に偏るだけに、手に取りやすい一般書やウェブサイトで掲載箇所を指摘するような配慮が欲しかった。著者のプライオリティーへの配慮の表れではあろうが、本書一つの著作として見た場合、該図が示されていないのは、地図成立背景の議論に関する理解を、必要以上に難しくしているのではないだろうか。

次に、全体にわたる本書の特徴について述べていきたい。本書の出版以後、評者は、歴史や中国についてそれ相応の勉強してきた人から、「モンゴルの時代」なんか「出版文化」が存在したのでですね、という素直な感想を何回か聞いた。書名だけをしてすでにモンゴル時代に対するイメージ(偏見)を覆さんとしているのである。本書を部分的にでも読んだ者は、中国史におけるモンゴル時代(元代)の意味に一樣に驚きを示し、研究の進展によ

る歴史像の変化にさらなる興味を抱く。それは、杉山正明氏が多数の一般書と『モンゴル帝国と大元ウルス』により提示したモンゴル時代の歴史世界を、具体的に示すことになっている。著者の執筆の意図は、各章の「はじめに」の部分を読むだけでも明確であるが、当時の文人が生きる政治と学問の世界を我々の眼前に現出させているところに、本書の最大の価値があると考える。今後、本書の枠組みと成果の上に、あらたな研究議論が展開していかざるを得ない状況が生まれたことは言うまでもないだろう。各論がそれぞれ、時代的にも地理的にも分野としても、かなり広範な世界の中で、モンゴル時代の新たな中国文化像を提示している。今後、どのような分野の研究をやるにせよ、モンゴル時代に触れる限り、本書は必読の文献となると断言したい。

また、本書の特徴として、資料の博搜、及び徹底的な善本利用と版本比較の姿勢が通底している点も挙げたい。典拠を引用する際には、なるべくオリジナルに近い版を選び、たとえそれが未出版であっても敢えて利用する。それと並行して、出版文化を扱うだけあって、抄本や覆刻本・和刻本などを含めてテキストを比較した上で、最善本を選定する過程もおそろかにしない。ただし、括弧で括って示される書籍のバージョンは、時に大陸や台湾、日本の各図書館でしか閲覧できないものも多く、読者がそれを利用しようとする際には、どんな版本があつて、そのうちどれが現時点で利用可能なのか、そして、それが著者が利用した版とどういう関係にあるのか、などを調べる必要が出てくるので、その点は気をつけなければならない。

一方で、本書が、先に述べた目的の達成を最優先にまとめられ

た一書であるため、各論での説明が簡単に過ぎるところがあるようにも見受けられる。あるいは、これも利点である反面、理解を難しくしている原因だと考えられるのは、「いちいち論文に仕立てるほどのこともないが、紹介しておくことも無駄ではないであろうささやかな発見、新出資料の類いは、銭大昕の翠みに倣い、短い節記となし、註に載せた」（一四頁）という点である。つまり、本論と多少離れても、研究史上重要な問題に関する発見や著者の考えであれば、関連資料や見解が註に載せられているのである。特に、比較的新しい文章の中で提示されたり、今回著作に収めるにあたって添加された記述に、そういう類の話題が多い。著者の各資料の読み込みは並はずれており、これまで提示されることになかった論拠・出典が各処にちりばめられている。その一方で、基本的な資料やそれを利用した先行研究については、煩を避けて書目のみを提示するか、引用を繰り返し行わないことも多い。そのため、本書を真に理解しようとすれば、ある一つの問題に関する資料を集成して理解し、さらに、研究史上の幅広い問題に関する発見をあちこちから拾って消化していくという過程が、読者に求められるのである。

それに関連して、一つだけ内容でなく形式について難を唱えれば、すべての読者が簡単に見ることのできない資料を提示する場合には、時に現代日本語訳と併せて本文（白文）を提示して判断を仰ぐ必要もあつたかという点である。第2章で扱う「直説通略」の撰者序を訳した箇所（八二―三頁）などは、論文刊行時の訳を手直ししているとところもあり、著者の読みの正しさを問うべきかと思われる。資料を引用している箇所も、その引用方法が説

明されていないために、正確な引用なのか判断できない例もある。例えば、同章で『直説通略』が「契丹国志」から引用した部分について、「鄭鎮孫が引用する部分は、契丹の始祖伝説である」（一二〇頁）として、二字下げの逸話を載せる。しかし、それは『契丹国志』及び『直説通略』の該当箇所（後者なら八一頁に図2-1として影印される）の内容説明のようであり、どちらの現代語訳でもない。特に、川の契丹名「北七里没里」と「莫羅箇没里」は、それぞれの著作で、「華言所謂」（『契丹国志』）、「中国人喚做」（『直説通略』）なら「土河」・「潢河」と説明され、続きの記述はこの「土河」・「潢河」を使って説明されているのに、著者は契丹名のみを以て内容説明を続ける。これでは、これらの著作が遊牧民族に対する記述を厚くしていた、と主張する著者の見解に都合がいいように説明されているのではないかと穿った見方をされる恐れがある。同じく、「のち、三人の国主が現れた」という表現の箇所も、内容的には間違っていないが、図2-1の『直説通略』では「後頭有二箇国主」と読めるし、『契丹国志』では「後有一主」の箇所に対応するため、現代語訳としては訳し間違っているもととられかねない。つまり、提示の時にどちらの資料に即した訳なのか、直訳か意訳か要約か内容説明なのかをはっきり説明する余裕が欠けているように感じられる。もともと、このような重要な資料が影印・公刊されさえすれば、読者の歯がゆさは減少するはずであり、著者が『直説通略』は、文学、言語、歴史各方面において、貴重な資料となることはまちがいない。

『歴史通譜』もふくめて、所蔵機関における影印出版がのぞまれる」（一三四頁）と本章を結び意見に、評者は改めて同意を示し

たい。

また、本書は、著者の目的である「モンゴル時代の雰囲気」を伝えて余りある一方で、統計的手法や表・図などがやや不足している点は、特に日本語ネイティブでない研究者が本書の価値を理解する妨げとなっていることも否めない。同じ第2章で、一七種の著作における歴代統治者数と統治年数を一覧にした、研究価値の高い「モンゴル時代の通史」表（一〇八―一九頁）を載せるものの、表に関する説明は本文に一言もなく、表からわかる特徴、どこに注目すべきかにしても、すべて読者側の読解に委ねられている。

そして、これは欲張りな注文かも知れないが、著者が「研究の最終的な目的」（一四頁）としてあげた「モンゴル時代の文化政策と出版活動を見渡し、その全貌をあきらかにすること、そして同時代の文学の分析にゆがみのない視座を提供し、じゅうらいの文学観を正すこと、モンゴルによって生み出された文化がいかにして同時代の高麗、日本はもとより、のちの明、清、朝鮮、日本に伝播し、影響を与えていったかを明らかにすること、遡ってモンゴル時代の目線から同時代資料が少ない遼、金、宋の社会文化の一端を明らかにし且つ明への連続性、変化をも眺めること」（一四頁）を達する過程で、他の時代を専門とする学者も含めた共通の認識となるような著作を、同じ「出版文化」のテーマで作り上げていただくことを将来期待したい。全体の資料を把握し、その分析に成功した著者にして初めて、それを時代順に数値として提示したり、共通の資料集として利用できるようにまとめることができると考える。「従来の」「出版史」のような編年、分

野別の概説書」やそれに類似する研究を、いつの日か提示されることを、「錢大昕以来多くの人が試みそして挫折してきた『元史』の改訂、再編纂」(六七頁)をを目指す者には、ぜひ期待したいと考える。併せて、「別の機会にそれぞれ詳細に論じることとする」(二五頁)などとして、今回の著作では深くは論じなかった、より広い視野に裏づけられた研究を、続々と発表していただきたい。「大元時代」明初の類書に収録された地理の全情報は、整理、校勘の上、別に資料集として供する予定」(五三七頁)などは、非常に楽しみである。

本評では、各論における資料の読みや解釈の提示について、細かな異論や疑問がある部分を列挙する余裕は無かった。それよりも、本書の画期性と質の高さを、より広く知ってもらいたいと考えた。「大元ウルスの事象を理解してはじめて朝鮮半島、日本のことがわかる場合がある。朝鮮半島、日本の資料からはじめてわかる大元ウルスの事象もある」(六六一頁)という指摘は、多くの研究者が本書を必要とすることを示している。本評によって、本書の一部にでも目を通さなければならぬと理解する研究者・学生が世界中に現れ、「終章」で批判の対象となっている、評者も含めた同時代研究者が切磋琢磨し、資料状況と言語の壁を越えようと努力を始めるきっかけとなっていけば幸いである。

① 拙稿「日本における最近の元代史研究—文化政策をめぐる研究を中心に」(『中國史学』第二巻、二〇〇二年一〇月)の二二六―三〇頁において、本書の第一、二、五、七章の初出論文を解説し、各論考の題名(つまり本書の章名)のみからは想像できない豊富かつ重要な内容を含むことを指摘した。

② 松田孝一評「杉山正明著『モンゴル帝国と大元ウルス』(京都大学学術出版会、二〇〇四年二月)」「『東洋史研究』第六三巻第四号、二〇〇五年三月」。

③ 評者が気づいた限りでも、二十三箇所「別稿で論じる」に類する表現がある。そのうちのいくつかは、すでに論文として発表されている。例えば、「寺観祠廟の歴史を創建から現在まで通史的に述べ、絵地図や関連の碑文、歴代の制命、廟神の靈異、縁起などを一冊の書に纏める」(二五四頁)意味や経過については、著者が「終章」(「序章」)と対応してやはり絵本と陶磁器というモノを象徴的に挙げる)の註でも触れる。「龍虎山志」からみたモンゴル命令文の世界——正一教教団研究序説——(『東洋史研究』第六三巻二号、二〇〇四年九月)や「徽州文書新探——『新安忠烈廟神紀実』より——」(『東方学報』第七七冊、二〇〇五年三月)などで明らかにされている。また、「学びの世界——中国文化と日本」(平成一四年度京都大学附属図書館公開展示会図録、京都大学附属図書館・総合博物館・大学院文学研究科、二〇〇二年一〇月、関連URL: <http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/ten-ikkai/2002/zuoku/>)「幻の『全室粟』(『漢字と情報』一一、二〇〇五年一〇月)」「徽州文書にのこる衍聖公の命令書」(『史林』第八八巻第六号、二〇〇五年一月)、「両足院——命令と外交の軌跡——」(共著、平成一八年度東方学会関西西部会・建仁寺両足院、京都大学大学院文学研究科国語国文学研究室、二〇〇六年五月)、「農業簡要」からみた大元ウルスの勸農政策(上)」「『人文学報』第九三号、二〇〇六年三月)など、精力的な成果発表を行っているが、いまだ論文としては詳しく論じられていない主張も多いと思われる。

〔附記〕 脱稿後、高橋文治氏による本書の書評(『東洋史研究』第六五巻第三号、二〇〇六年二月掲載)を目撃した。あわせ参照された。

(A 5判 七三二頁 口絵一八枚 二〇〇六年一月
名古屋大学出版会 税別九五〇〇円)